

旭川文学資料友の会

友の会通信 第26号

発行・NPO法人 旭川文学資料友の会
 〒070-0044
 旭川市常磐公園 旭川市常磐館内
 電話 0166-22-3334
 印刷・株式会社あいわプリント

新職員自己紹介

事務局長 山下敦規

断想

会長 十河宣洋

新型コロナウイルスの流行で、日本だけでなく世界中が委縮している時代ですが、人類の歴史の中ではほんの些細な出来事かも知れません。針の先でつittedような期間のようです。

外出自粛でこれを取り切れそうに見えましたがテレビ等の報道を見ていると、残念ながらまだ日本人の徳性はそこまで育っていません。心づいていなくつたというより、心のゆるみがあると言えそうです。

わが資料館の現状を言えば、十二月から三月まで資料整理のボランティアを休みにしました。展示室は通常通り開放していますが、来館者は少ないようです。

来館者は減っていますが、道外からの来館者があつたりします。

〈郭公へゆく水光みな纏う〉

粕谷 草衣

粕谷草衣は北海道の俳壇に大きく寄与した俳人です。シベリヤ虜囚中に偶然手に入れた、表紙も前頁も破れきつている「奥の細道」を耽読して俳句に魅了され、復員後俳句に身を置いたといひます。

このことを彼の全句集で知った時、文学の持つ生命力というかしぶとさの様なものを感じます。文学の底力が我々の日常を支えているようにも思われます。それが死と隣り合わせのような場面に力を発揮するのかもしれない。

水の光りの中を郭公へ行く、春の訪れである。みな纏うは明るい未来を感じさせる。〈遺品あり岩波文庫『阿部一族』鈴木六林男〉この句にも戦争の違和感を思わせる状況があります。人類の持つ矛盾を文学が突いているように思ひます。



昨年十一月から旭川文学資料館の運営のお手伝いをさせていただいております山下です。私は長年旭川市役所の仕事に携わっていましたが、常磐館での仕事は初めてです。私が市役所の職員だった頃、当館はまだ青少年科学館で、幼稚園児の我が子を連れてよく家族で遊びに来ていました。本来なら最先端の科学知識を提供する青少年科学館ですが、まだその当時は、私が小学生の時に見て驚いた既に時代遅れになったものも展示されており、私にとっては懐かしい思い出の場でしたが、子ども達には見るも珍しい新鮮な学びの場が提供されていた科学館で、その奇妙なアンバランスな雰囲気が漂う場所でした。

そんな思い出がぎっしり詰まった常磐館に、平成二十一年度から旭川文学資料館がオープンし、今日まで多くのボランティアの皆様方が、郷土の貴重な文学資料の調査、収集、整理、保存をとおして文学遺産を守っている様子を目の当たりにして、改めて郷土旭川が育んだ文学の多様な奥深さを認識したと同時に、その真摯な取組に強く心を打たれた次第です。

私はこれまで旭川大雪クリスタルホルルの建設や旭川地域の観光行政、旭川への企業誘

致などの仕事に携わってきましたが、文学については旭川市中央図書館長を一年間務めただけで、日常でも読書には親しみが薄く、文字よりも寧ろ映画に興味を持っていただけに、今回旭川文学資料友の会の事務局長という役目をどこまで果たすことができるのか、私自身も心配しています。しかし引き受けた以上は、浅学非才ながらも何とか多くの市民が訪れる文学資料館、同時に文学に精通した方にとっても旭川の文学史、文化が堪能できる文学資料館を目指して運営してまいりたいと思っております。

十一月から当館に通って三か月が過ぎました。朝、常磐公園を通って通勤する先に文学資料館の入っている常磐館が、雪に覆われた千鳥が池や木々の隙間から見えて、だんだん近づいてくるに従い、このコンクリートと煉瓦が一体となって調和している建物が、私はまだ小学生だった頃の青少年科学館の記憶を雪景色の中に思い出させ、当時の懐かしさとこれからの課題の重さや不安が入り混じった不思議な気持ちを湧きあがらせてきます。そんな気持ちに掻き立てられながら文学資料館に通っています。文学経験は乏しく力不足ではありますが、旭川の文化遺産を守るお手伝いが出来ればという気持ちを抱きながら、ボランティアの皆様方と共に運営してまいりたいと思っております。どうぞ宜しくお願いいたします。

企画展

「小熊秀雄と旭川の詩人・歌人たち」を終えて

沓澤章俊

旭川ゆかりの詩人 小熊秀雄の没後八十周年を記念した企画展を昨年九月十五日から今年一月三十日まで開催した。

当館の常設展でも小熊秀雄はメインパーソンで、旭川ばかりでなく全国区の詩人として、いや、わたしが思うに、日本以外でも読まれるべき詩人として位置付けても、大きな間違いにはならないであろう。

彼の詩の翻訳は、旭川を訪れたこともあるアナトリーイ・マモノフによるロシア語訳(一九七二年)があり、一九八九年にはディビッド・グッドマンの英訳が出版され、さらに小熊の童話「焼かれた魚」は、一九九三年アーサー・ビナードによる英訳、翌年にはマーチン・クレンマンによるタイ語訳が出版されている。

ちなみにアーサーさんは現在、小熊秀雄賞の選者でもある。その賞を運営する小熊秀雄賞市民実行委員会発行『飛ぶ櫓文庫』の中の一冊には、金光林キムクワリンによる小熊の詩「長長秋夜じやんじやんちゆう」の韓国語訳が収録され、韓国語監修は第二十五回小熊秀雄賞受賞者で現選者の佐川亜紀さんが担当している。

さらに、近年、小熊秀雄が旭太郎の筆名で

台本を書いた漫画本が多数復刻されていて、彼のデッサンや絵は今も人気があり、池袋モンパルナスの画家達の中心人物として注目されている。文字を追うことに疲れた方は、彼の漫画やデッサン、絵を追ってみてはいかがだろうか。

この企画展では、彼が旭川で新聞記者として過ごした大正十一年頃の二十代はじめてから、昭和三年に上京する二十七歳までの約七年間に焦点をあて、彼と彼を取り巻く詩人・歌人たちを展示紹介した。小熊と同じ時期に上京し、ほぼ同時期に獄に入れられた詩人今野大力(没後八十五周年であった)、短歌の会、旭川歌話会で一緒だった軍人歌人の齋藤瀏(彼も二・二六事件に関わり投獄される)と、その一人娘でのちに著名な女流歌人となる齋藤史、それから、旭川市内の各学校に通い、作品を小熊が担当する旭川新聞文芸欄に投稿していた若い詩人たち等。

彼、彼女らから見た小熊秀雄についての証言ともいえるべき文章も展示紹介した。

コロナ禍もあり、期間中の来館者は例年より減少したが、それでも約三五〇名の方々に



企画展示室風景



◀小熊秀雄詩碑前で

▶小熊秀雄賞受賞者の長田典子さんの企画展示室の小熊秀雄の写真と共に



観覧いただいた。
 十月十六日には、第五十三回小熊秀雄賞を受賞した長田典子さんが来館。小熊が旭川時代、旭川新聞の記者として『黒珊瑚』という筆名で記事を書いたことを知ると、「わたしの指にはめているこの指環、偶然ですが黒珊瑚です」と長田さん。その後、資料館横にある小熊秀雄詩碑と、すぐ近くにある今野大力の詩碑を訪れた。
 前後するが、十月十日(土)には、記念講演として、旭川歴史市民劇「旭川青春グラフィティ」



イティ・ザ・ゴールデンエイジ」総合プロデューサー兼脚本担当の那須敦志さんが「旭川歴史市民劇とゴールデンエイジを生きた文化人」という演題で、旭川歴史市民劇の登場人物や時代背景を、画像や動画、音楽を交えながら分かり易く、かつ詳しく話された。コロナ対策として定員四十名としたところ、ジャスト四十名の参加者でホッと安心した次第です。
 そして、予定通り三月六日、七日、旭川文化会館小ホールで、客席間のソーシャルディスタンスに十分配慮し、旭川歴史市民劇が上演された。
 両日共に満員御礼で、旭川の歴史や文化に



講演する那須敦志さん



あらためて興味を持ったという方が多く、年に一度でも旭川を題材にした劇を上演してほしいという声もあった。
 最後に、文字を追うのに疲れた方のため、一冊の美術雑誌を紹介したい。
 それは、生活の友社発行の美術雑誌「美術の窓」二〇二一年二月号。池袋モンパルナスの特集。実はこの「池袋モンパルナス」の命名者は、小熊秀雄である。
 小熊と交流があり、彼の詩集の装幀もした画家 寺田政明の子息で俳優の寺田農さんや、今も健在の池袋モンパルナスの画家 野見山 暁治さんのインタビュ記事、豊島区文化商工部デザイン課ミュージアム開設準備学芸グループの取り組みの紹介、その他小熊をはじめとする池袋モンパルナスの画家の作品などが掲載されていて、とても面白い。(蛇足として) 恥ずかしながら私も今回の企画展で展示した資料の紹介も含め、小熊秀雄について一文を寄せておりますので、興味のある方はお読みくださればうれしいです。旭川文学資料館で一冊税込一六七六円にて販売しています。

次年度に計画している 企画展等の紹介

今年の連休明けの五月十一日から八月二十八日まで、「木野工『旭川今昔ばなし』直筆原稿展」(絵・写真と共に)を開催します。

木野工(一九二〇～二〇〇八)は旭川生まれの作家。代表作は旭川の中島遊郭を舞台にした『檻樓』。今回は彼が勤務していた「北海タイムス」に一九八二年三月十四日より一九八三年七月十六日まで連載した「旭川今昔ばなし」(それを加筆、再編成して発行したのが総北海発行の『旭川今昔ばなし』)の直筆原稿をもとに、彼の作品の題材となった旭川の建物や街並みを、旭川スケッチ研究会の方々の絵画や版画と、懐かしい写真も併せて展示紹介します。

期間中の五月十五日(土)十三時半から、旭川スケッチ研究会のメンバーで今年百歳になられる菱谷良一さんの講演会を企画展示室にて開催する予定です。演題は「百歳!!『旭川今昔ばなし』」。木野工との接点、旭川新聞と父、師団通りの店と人、映画館や市場のことなどを語っていただこうと思っております。定員申込制を予定しています。マスクの着用、手指の消毒にご協力ください。



木野 工



木野工著『旭川今昔ばなし』

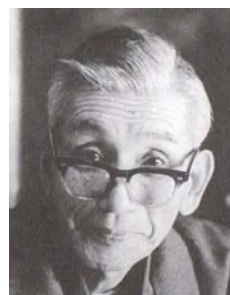


旧中島遊郭 版画／菱谷良一



旭川商工会議所 中村忠雄

今年十一月から来年の三月まで、第二十四回旭川文学資料展として、企画展「旭川ゆかりの俳人 藤田旭山展」(仮)を開催する予定です。



藤田 旭山
(1903～1991)

藤田旭山(一九〇三～一九九二)は士別生まれ。本名 国道。庁立旭川中学校(現旭川東高校)を卒業(第十四回)し、明治大学在学中に室積徂春に師事。昭和十九年から四十三年まで旭川工業高校教諭を勤める。同四十三年から俳誌「俳海」を主宰発行。今年没後三十周年になります。

こちらの企画展も、期間中に講演会を実施いたします。

また、コロナ禍の中にありますので、予定が変更になる場合があるかも知れませんが、どうぞ御参加のほど宜しくお願いいたします。

尚、木野工、藤田旭山については、旭川文学資料館の常設展示室でも現在展示中です。

その他、常磐館キッズルームを使用している、朗読会、演奏会等を計画中です。実施日時が決まりましたら、随時お知らせいたします。

有島武郎と『松むし』

—その五—

「われ」が詠まれた短歌

片山 礼子

今号は、前号で取り上げなかった短歌について紹介をしたいと思う。

- (十一) 道はなし世に道は無し心して荒野の
土に汝が足を置け
- (十二) さかしらに世に立てりける我がこれ
神に似るまで愚かしき今
- (十三) 生れ来る人は持たすなわかうけし悲
しき性とうれはしき道
- (十四) 雲に入るみさこの如き一筋の戀とし
知れば心は足りぬ
- (十五) 蝉一つ樹をは離れて地に落ちぬ風な
き秋の静かなるかな
- (十六) 明日知らぬ命の際に思ふこと色に出
つらむあちさみの花
- (十七) 命断つ筈しあらは手に取りて世の見
る前に我を打たまし
- (十八) 人波のよせてはかへす東京のちまた
に立ては物の淋しき
- (十九) 山を出てし木樵か負へる大鋸にやは
ら日あたる春は来るらし
- (二十) おもひ出もかはかりなりや軒の端の

- 雨のしつづくの絶えつゝきして
- (二十一) 砂にゐる佐渡を見居れば涙しぬかそ
けくなけく我にやは似る
- (二十二) 信濃尻の野尻の湖し遠見れば刀のこ
とし秋さひしかな
- (二十三) ありといはゝ君は涙に宿るらむ君を
おもへはなみた流るゝ
- (二十四) 雪解する泥の大路を素脚にて情容赦
もなく歩まはや
- (二十五) しみしみと伏せ拝みけり病室の窓よ
り見たる七尺の春
- (二十六) ふしくれし櫛の大木の片枝のみ生き
残りたり戀さめ心
- (二十七) 物事へは唇寒しいはさればあさまし
き身よ火となる心
- (二十八) 赫灼の陽の光をは胸にうけ山なみな
して地は吐息する
- (二十九) 陸奥のおくの細道ゆくわれに霜おき
そへて冴ゆる月かな
- 最後になりましたが、次に示す歌は、安子
さんが亡くなった時に、愛息に代わつて武郎
さんが詠んだ歌、もう一首は、有島武郎自身
が詠んだ短歌である。
- (三十) 母君よわがはゝ君よわがはゝ君よ我
が母君よ (行光 敏行 行三)
- この短歌のあとには、行光・敏行・行三の
三人の子ども達の名前が記されている。
- (三十一) 我兒等よ御空を仰け今宵より汝を見

守る星出づらんど (武郎)

(番号は引用者)

他に、武郎は短歌以外に詩や俳句を残している。次回でも紹介できればと考えている。

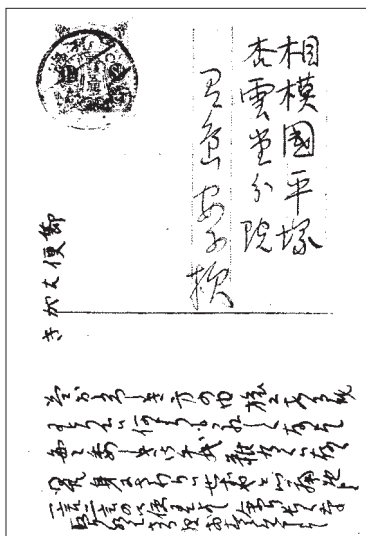
(付記)

有島武郎から安子さんに宛てた葉書と安子さんの写真のコピーです。

『有島武郎全集第三巻』(筑摩書房)



安子肖像



安子宛はがき

ボランティアのみなさん

戸島 雅子

昨年十一月と十二月、受付当番のボランティアをさせていただきました。コロナ禍のせいか来館者は少なかつたのですが、膨大な本に囲まれた静かな空間で、心地よい時間を過ごすことができました。

私は老母の在宅介護中なので、たいしたお役には立てないのですが、何かボランティアをしたくて、ひと月に一度最終週の金曜日に当番をあててくださるようお願いしたのです。ところが、一月の当番前日の夜から母の体調が思わしくなくなり、金曜の朝はもう立ち上がることもできなくなっていました。仕方なくお休みさせていただきましたが、当日のことですっかりご迷惑をおかけしてしまいました。申し訳ないことでした。

企画展の最終週で、もう一度ゆつくりじっくり見たいと思っていましたので、私自身も残念なことでした。

こちらの資料館には、旭川ゆかりの文学者に関わる非常に多くの資料が保管されていると聞きました。ボランティアの方々もそのよくな古くからの資料の保存・管理という繊細な作業に取り組んでおられると聞くと、私の様なはずばらでいい加減なものでは生涯お手伝いできないかもしれません。まずは、私にできる範囲で、月一回の受付当番をキャンセルすることなしに続けたいものだと考えています。どうぞよろしくお願いします。

北の大地で

佐藤 穂

ひよんな事で、姉と二人持続可能な様に交代で一人分のボランティア活動を始めるハメになりました。腕時計なしの自堕落な生活を少しは改善できるかなあと期待しながら！

まずは資料館の膨大で圧倒的資料を前にすると、人はパンのみに生きるにあらずを証明する貴重な資料集か、個人情報保護逸脱の証拠資料か、文学的垂れ流しの成れの果か、はた又粗大ゴミか等々種々の思いが湧いては消えて行きます。見方を変えると我々の先祖の先住民アイヌの大地北海道への植民活動を眺めて居る事になるのではなからうか(どんな思いで北海道へ来たのか、そもそも植民意識は有ったのか、対立は今でも続いている。それはアメリカでも)、もしかしたら満蒙開拓団の末路と紙一重の差しかなかったかも知れないと思うと何とも複雑な気持ちが交錯してしまふ。

昔の事が和暦のみで書かれているものを読むと一体何年前の話か咄嗟にわからない事が多々あります。特に年代記もので歴史認識が疑われてガツカリする。積もり積もった資料は我々に色んな事を突き付けて来るものだとつくづく思う。

二〇二一年二月二十日

想い出

織田 典子

〈鈴木政輝さんのこと〉

二十才ちよつとすぎの頃、お茶をならいに鈴木宅へかよつていた時、となりの室でお花をおしえていた。

で、いつてみたらということ、いつたけど、花のつつみをもらい、すわつてはみたものの、半分は、いやな花。で、それを横においていた！と、そこへきた先生？が「こつちの花も花、かわいそうでしょう」と、全部つかつていけてくれた。それをみて、「あ、だめだ、こういうのはできない」と思つて二度といかなかつた。

又、「お母さん美人なのに、にてないね」といわれていた私に、「ぼくは、母さんよりのり子ちゃんの顔の方がすぎだよ」となぐさめてくれた人。色々生性(せいせい)のうわさの多い人だつたけど、やさしい人だつたよ。

三好文夫さんのこと

いつも自転車であらわれて、玄関先で立話しをしてるかっこいいおじさんというイメージ。資料館にある、写真の帽子の人とは、ちよつとちがう。

資料館の沓沢さんに、鈴木与之助さん、真崎普吾さんのことを聞いたら、旭川の文学に関係した人とのことで、

真崎普吾さんのこと

私の札幌の時の保証人をおねがひした人。小樽へ高校の友だち数人と遊んだ帰り、札幌駅についたのが六時半を過ぎていたと思う。門限の七時におくれるのは、目にみえている。で、まっすぐ狸小路の店に。そこから寮のシスターに電話をもらつたり、髪の毛を、切ってもらつたり、ごはんを食べにいったりしていた。

〈鈴木与之助さんのこと〉

母が東京にきた時、北品川に、たずねてきたり、又、母と茅ヶ崎へたずねていつたり、新橋の料理屋さんでこちそうになつたりした。でもその後、奥さんに家を出された(長年の女性関係で)ときき、会えなくなつてしまった。(その話は、だれに聞いたのか！)

交流室での活動グループ紹介

格別な句会

佐々木 宏

私達「群の会」は、毎月第四土曜日に旭川市文学資料館の一室をお借りし、俳句の句会を開いています。

すぐ近くを流れる石狩川や常磐公園の四季折々の風情は、私達に格好の素材を提供してくれます。また、旭川市に縁のある作家たちの作品や写真が展示されている文学的雰囲気漂う文学資料館での句会は、格別のものがあります。

会員は、旭川市を中心に、十数名。俳句についてはさまざまな考えがありますが、狭い枠にとらわれることなく、「俳諧自由」ということで、会員それぞれが思いを込めて句作りに励んでいます。句会は、八名前後での句会となりますが、いつも楽しい句会となっております。

葡萄のつぶつぶ男性合唱団の粒々
加川 憲一
鮭の恋奈落の水の後の月
十河 宣洋
満月の街少年の暗い脛
前田 恵
地下栽培の茸の叫び浦島がいる
鈴木千鶴子

金星の生命体はけむり茸 かさいともこ
枯れ葉か落ち葉か諸事情という事情 小林 ろば
やっかいな人間の闇鳥渡る 谷川かつゑ
銀の皿白身のフライ花すすき 佐藤 博己

俳句大学っておもしろい

かさい ともこ

俳句を作らない俳句の会が始まると知り、俳句をもっと勉強したいという時だったので喜んで参加を希望しました。

第一回目は『金子兜太を読む会』として始まりました。座長の十河宣洋氏は金子兜太の元で長く俳句を作ったことのない参加者にとつて、最初のテーマとしては大変興味深いものでした。金子兜太を師と仰ぐ参加者も沢山いて、その方たちの話も聞くことができました。

二〇一八年五月、第一回目に皆の希望で正式な呼称を「俳句大学」としました。それからは月一回の勉強会が、新型コロナウイルスのため文学資料館が閉館になった時を除いて毎月開かれています。「金子兜太の句を読む」は、おおよそ一年にわたり、その後は座長が選んだ近代以降の俳人の作品と、その時代の背景を学び鑑賞するという内容です。私の句の鑑賞も、初めた頃より少し深くなったような気がします。俳句の愉しみは作るだけではないということも教わりました。

この五月でまる三年。あつという間でした。敢えて俳句を作らない「俳句大学」こんなに楽しくて、より俳句を作りたくなるのは想像もできませんでした。このような場を頂いて感謝するばかりです。

了

ラクーナ句会

前田 恵

私の趣味は俳句。二十数年前に始めて以来ずっと俳句が大好きだ。句会も楽しくて、いつも待ち遠しい。

「俳句を楽しむとは誰も思っていないよ。俳句は難しく堅苦しいと思ってる」とと俳句の先生が言うのが残念だった。

「楽ちゃんな気持ちで、私と俳句を作ってみない？。句会の名前は『ラクーナ句会』にしたいの」

若い友達(四十代)にそう話したら、それならやりたいという。フェイスブックを通して彼女と同じ年代の女性も入会した。

このようにして昨年の八月から三人だけの『ラクーナ句会』が始まった。月に一度の句会をどこで開くか、色々迷ったが、沓澤さんと東さんのご厚意に甘えて、文学資料館の一室をお借りすることにした。

決まっているのは第二土曜日の午後一時に資料館に集まることだけ。俳句は出来た分を持ち寄る。その句を三人でいいねいに時間をかけて考えて話し合う。時々、他の俳句グループの句会報を読んで、句会とはどのようにやるのか、どのような俳句をどんな言葉を使って俳句にするのかを勉強する。

そんな、のんびりとしたラクーナ句会に二人はいつも笑顔で集まり、楽しい、しかし鋭い俳句を作る。私はますます俳句が好きになった。

風邪ひいて冷たき体発光体 莉子
チャイム鳴り宅配便だ焼き栗だ 柊子

完

資料館だより

受贈資料(敬称略)

(二〇二〇・八〜二〇二一・三)

- ・岡崎優美子 宮崎二三子関係資料
- ・鶴野しのぶ 詩誌「行方+」
- ・与坂 守 旭川市内校内誌、学校文集
- ・黒田 忠 「青女」関係色紙、短冊、木野工直筆原稿他
- ・西勝 洋一 旭川、道内関係歌集他多数
- ・東 延江 全国の詩誌他多数、馳星周著『少年と犬』(直木賞受賞作)
- ・岡田 雅勝 文芸誌「棧敷」数冊
- ・宮本 和俊 宮本和俊著「たたかうきみのうた」
- ・川村 暮秋 「おくのほそみち」VHSビデオ全十二巻
- ・富田 正一 旭川、道内関係詩誌多数、富田正一著 ミニロマン小説『人生あれこれ』
- ・森内 伝 詩誌「ななかまど」十八冊
- ・佐藤 将寛 佐藤将寛個人誌「ポウタラ」、日本児童文学学会北海道支部機関誌「ヘカッチ」、佐藤将寛・菊池慶一執筆『オホーツクの嵐に耐えて―北見文選と生活綴方運動』
- ・鎌田 章子 米原瑞穂地区開基百年記念誌

『拓きし路』、『愛別町百年記念誌』他

・二宮 清隆 二宮清隆詩集『海へ』

・岡和田 晃 岡和田晃他執筆「ナイトランド・クオータリー」各号

・石塚正英・岡和田晃編『史学研究とゲーム研究の徒・蔵原大―遺稿と追悼―』

・柴田 望 詩誌「フラジャイル」十号(三周年記念号)

・西川 良子 俳誌「雪華」各号

・鈴木 章 児童詩誌「サイロ」

・那須 敦志 「小樽新聞」「旭川新聞」「北海道日日新聞」掲載の齋藤瀏、齋藤史関係記事(複写)他

・早川 裕恵 詩誌「フロンティア」一〜五十五号、「フロンティア」既刊(全号)収録目録、「フロンティア」全号の表紙、目次、あとがきファイル他

・旭川ケーブルテレビ株式会社 (小熊秀雄作品掲載資料)

・雑誌「國本」(昭和五年)詩誌「詩・研究」(昭和十年代)消費組合小説集『七月二日をめぐって』(昭和七年)

その他、各地文学館、記念館館報、各地市民文芸、文芸同人誌、歌誌、俳誌、詩誌等たくさんさんの寄贈を受けました。心よりお礼申し上げます。

友の会人事動向(敬称略)

【新入会員】

- 朝比奈康博、中村 園、川西 勲、加藤 桂子、高木 宏明、竹澤 勝昭、山下 敦規、戸島 雅子

【現在会員数】(二月末現在)

一八二名(うち法人六件)

編集後記

立春過ぎの大雪で、旭川市は八年ぶりの積雪一メートル超になったとか。今や豪雪地帯となった岩見沢市の皆さんはどんなに大変かと思う。しかし、日差しは確実に暖かさを増し、春への期待に胸が膨らむ。これでコロナ禍が去ってくれたら言うことはないのだが。

先日、二〇〇一年の旭川文学資料研究会発足から二〇一〇年旭川文学資料友の会設立、NPO承認設立に至る各年度の「会報」を読み返し、その当時の会員の皆さんの文学館設立への並々ならぬ思いに触れ、熱量に圧倒された。故・相川正志会長の「昔を残し 会を残し 未来に続ける、重要な仕事を通じて旭川の文化の啓蒙と発展に寄与することを誓う」を今また重く受けとめなければと思つた。

(ま)